

〈熱中症になりやすい場面〉

各論 9. 夏季イベント（案）

熱中症は様々な場面において発生しています。その一つとして、夏季イベントがあります。本章では、夏季イベントにおいて注意すべき基本的な事項について解説します。さらに詳しく知りたい方は、「夏季のイベントにおける熱中症対策ガイドライン（環境省）」（以下、イベントガイドラインという。）を参照ください。

9-1. 夏季イベントの特徴

- ・ **人混みが発生しやすく、蒸し暑い環境になります**
- ・ イベント会場の施設や設備によっては、**日陰や飲料などへのアクセスに制限が出る場合があります**
- ・ イベント時は、対象が悪くても無理をしてしまいがちです

夏季イベントの特徴を示したイラスト

多くの人が集まる夏季イベントでは、周囲の熱がこもりやすく、風通しも悪化することで、体の熱を逃がしにくい蒸し暑い環境となります。

また、イベントは数時間にわたることが多く、参加者が施設の内外に滞留する場面も少なくありません。特定のエリアに人が集中し、自由に移動できない状態で直射日光にさらされると、局所的に暑さ指数が上昇し、熱中症が発生しやすくなります。

加えて、自動販売機の設置場所が限られている、給水所・休憩場所の設置が十分ではないなど、冷たい飲料や休憩場所へのアクセスが難しい環境では、熱中症の予防行動をとることが困難になります。

さらに、「年に1度のイベント」など特別な機会となる場合は、参加者自身が無理をしてしまいがちの傾向があります。一人で参加している場合は、体調の異変に周囲が気づきにくく、発見や対応が遅れるおそれもあるため、特に注意が必要です。

こうした特徴があるため、夏季イベント時は熱中症になりやすい場面といえます。

図1 人の集中による暑さ指数(WBGT)の変化 (2017年 東京都内で測定)

東京都内の野球場で観測したところ、午前中に観客が集中した1塁側下部にあるスタンドの座席では、日差しの当たり方が同程度だった上部にあるスタンドの座席と比較して暑さ指数が2程度高く経過しました。一方、午後になると、スタンド全体に強く日差しが当たり、バックネット裏は日陰だったため、日差しのある一塁側より暑さ指数は4程度低くなりました。

9-2. 夏季イベントの注意事項

基本的な熱中症予防、応急処置については、総論及び各論2～4を参照ください。

その上で、

参加者は、

- ・十分に睡眠と食事を取り、体調管理を行きましょう
- ・通常よりこまめに水分・塩分を補給しましょう
- ・イベント参加前に水分・塩分等をあらかじめ持参する、イベント会場の休憩場所を把握しておくなど、熱中症にならないよう事前に準備をしましょう
- ・体調に異変を感じたら、無理をせず休憩をとりましょう

主催者は、

- ・参加者が熱中症予防を行うよう促しましょう
- ・イベント会場および周囲の環境を事前に把握し、暑熱環境の緩和や給水・休憩場所の設置など環境整備を行きましょう
- ・熱中症が発生した場合に備え、あらかじめ対応マニュアルや救護所を準備しましょう

(1) 十分に睡眠と食事を取り、体調管理を行きましょう

熱中症の発生には、その日の体調が影響します。十分な睡眠時間を確保し、バランスのよい食事を心がけて体調管理を行きましょう。

(2) 通常よりもこまめに水分と塩分の補給をしましょう

気づかないうちに無理をしてしまうおそれがあります。喉が渇く前にこまめに水分補給を行きましょう。また、大量の汗をかく場合は、塩分も適切に補給するようにしましょう。

(3) 体調に異変を感じたら、無理をせず休憩をとりましょう

気が付かないうちに無理をしてしまいがちです。意識的に体調や暑熱環境に注意を払い、無理せず休憩をとりましょう。



主催者は無理をしないように呼び掛けるだけでなく、給水所や休憩所等の設置場所の周知や、定期的な休憩を呼びかけましょう。また、暑さ指数の測定・表示を行い、参加者に暑熱環境の情報提供を行きましょう。

(4) イベント会場及び周囲の環境を事前に把握し、暑熱環境の緩和や給水・休憩場所の設置など環境整備を行いましょ



< 熱中症が発生しやすい環境の把握と対策 >

熱中症が発生しやすい環境として、直射日光が当たる場所、風通しの悪い場所などを事前に把握しておきましょう。入場待機等で一定時間を滞在が予想される場所には、暑さを軽減できるよう、あらかじめ日陰等を設置しましょう。

待機列では自由に移動ができず、自動販売機で飲み物を買うことや給水スポットを利用することが困難となるため、熱中症のリスクが高まります。これを避けるため、予約制の導入、プログラムの工夫により人の集中を避ける、入場ゲートの増設により待機列ができにくい導線を確認するなどの対策が考えられます。また、高齢者や子どもなど熱中症になりやすい人の来場見込みを考慮し、別の待機列を用意したり、専用の休憩所の設置などの対策も検討しましょう。各論5、各論6、各論7の注意事項も参照ください。

図2 イベント会場における暑熱環境の緩和

< 給水・休憩場所の設置と周知 >

十分な数のトイレ、飲料提供箇所、休憩場所の確保に加え、給水スポットの設置も検討しましょう。また、設置場所を参加者に周知するとともに、必要に応じて現地での誘導も行いましょう。

< イベント中止判断の準備 >

イベント実施前において、想定以上にイベント当日の環境が悪化し、多数の熱中症の発生が危惧される事態になる可能性があります。その場合に備えて、イベント中止の基準および中止の判断を行う責任者を、あらかじめ決めておきましょう。

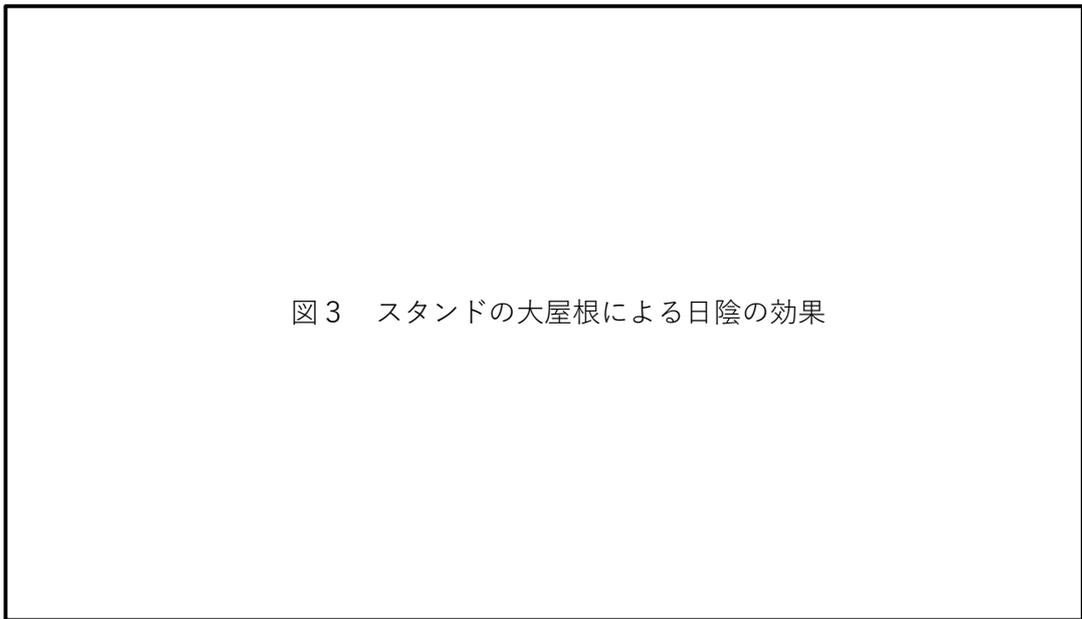


図3 スタンドの大屋根による日陰の効果

が定義されていません。

(5) 熱中症が発生した場合に備え、あらかじめ対応マニュアルや救護所を準備しておきましょう



熱中症が発生した場合に備え、適切な対応がとれる体制を整備しましょう。適切な応急処置を行うことで、熱中症の重症化を防ぐことができます。イベントを開催する際には、熱中症が発生した際の対応マニュアルの作成や、救護所を準備しておきましょう。(マニュアルを作成する際の留意点については、イベントガイドラインを参照ください)

<救護所設置>

大規模なイベントでは、会場内に医療救護所を配置している場合があります。医療救護所で応急処置や可能な限りの初期治療と、医療機関での治療の必要性の判断を行った上で、必要に応じて搬送する体制をとっています。救護所設置の目安として、例えば「東京都が主催する大規模イベントにおける医療・救護計画ガイドライン」では、医療救護本部を設置するとともに、観客席1万席(人)につき1か所を目安に、医師、看護師からなる医療救護所を設置する方針を示しています。一方で、観客席イベントの規模が小さく救護所の設置が困難な場合、スタッフ全員が熱中症に関する知識を身につけておくようにしましょう。

<スタッフへの対応>

熱中症は、参加者だけでなくイベントのスタッフも発症する場合があります。仕事に従事していると、参加者よりも厳しい暑熱環境となる可能性があります。イベントガイドラインでは、スタッフ向けの対策(例)を紹介していますので参照ください。

(コラム：「救護所の開設による改善事例」)

コラム 救護所の開設による改善事例

「にっぼんど真ん中祭り」は、1999年から毎年8月末に行われているイベントで、各チームによる演舞が行われ、2008年以降、参加者は2万人、観客は200万人前後です。

2006年から愛知万博時に活動した医療チームが加わり、適切な対応を行った結果、重症の救急搬送者数が急激に減少しました(図3-12)。2005年では30名前後だった救急搬送数は2006年以降は少なくなり、平均(2006～2016年)で3名以下になっています。

